

水害で被災した民俗資料の取り扱いについて

国立民族学博物館 日高真吾 (2011.4.28.)

水害で被災した民俗資料は、汚水や汚泥による汚損と破損、その後の乾燥による木材の収縮による破損や金属部分の錆の発生、皮革の硬化といった劣化、損傷が生じる。さらに多くの場合は、倒壊した建物のがれきに埋もれてしまい、がれきとともに廃棄の対象となることが多い。

初期対応

1) がれきに埋もれている資料を安全な場所に避難させる。

注意点

- ・民俗資料の場合、小さなものから、大きなものでさまざまなサイズがあるので、作業者は安全に留意し、けがのないよう作業を行う必要がある。できれば、土木作業員のような足場の悪いところでの作業に慣れている方と一緒に作業をおこなうことが望ましい。
- ・汚水でかなり脆化が進んでいることが予想されるので、できれば2人1組となって、慎重に資料の救出に当たることが望ましい。
- ・救出後、十分に乾燥していない資料は急激な乾燥を避け、陰干しをしながら様子を観察する。

2) 水道水での一時洗浄を実施する。

注意点

- ・資料に泥が一度こびりついて汚損した場合、時間が立てばたつほど、とりにくくなる。したがって、ある程度強度のある資料はなるべく早い段階での洗浄作業を勧める。また、海水につかったものでも、あくまで一時的なことだけなので、内部にまで塩分が浸透し、脱塩処理をおこなわなければならないほど、塩分を含んでしまった資料はあまりないと考えられる。もちろん、使用歴に塩分と関わりを持つ製塩用具や漁撈用具、醤油醸造用具のものは別であり、これらの資料については専門家と協議しながら作業を進めることが望ましい。
- ・多くの資料は被災後、日にちがたっており、泥がこびりついていることが多い。したがって、簡便な水槽に溜めた水にしばらく漬け込み、泥を緩めてから洗浄すると資料に大きな負担を与えず、かつ効率的に作業をおこなうことができる。
- ・やわらかい刷毛やブラシ使用しながら洗浄すると、洗浄による表面の損傷を防ぐことができる。
- ・漆膜をはじめとする塗料のついていない資料や皮革資料は専門家の指示を受けるまで、作業はおこなわない。中途半端な洗浄は塗膜を剥離させたり、皮革をさらに傷めたりする危険性が高いので特に注意する。
- ・紙資料については、洗浄後の乾燥のなかでカビの繁殖が最も懸念される材質であり、カビで汚損した紙の洗浄は極めて難しい。したがって、保管環境がある程度整ったうえで、洗浄作業をおこなうこととし、それまでは、風通しの良いところで吸い取り紙等を用いながら、水分を取り除く作業にとどめ、カビの発生を極力防ぐことに集中したい。なお、海水につかった場合、大量に塩分を含んでしまうわけだが、これらの塩分はカビの繁殖を抑

制する効果もある。したがって、乾燥工程を含めた水洗環境が整うまでは、無理して塩分を除去する作業に踏み込まない方がいいと考える。

3) 洗浄した資料を乾燥させる

注意点

・気温がある程度低ければ、風通しのよいところでの天日干しでもよい。ただし、気温が25℃以上になる場合は、木材や塗料で構成される資料は、乾燥速度が急激になり、収縮変形の損傷を起こすので、その場合は風通しのよい場所で陰干しをおこなう。そのほか、金属、石、陶器のような温度変化に耐性のある資料はなるべく早く乾かして、取り扱いのしやすい状態にまで持っていくことが、レスキュー活動の効率化を図るポイントとなる。

4) 木材の殺菌作業をおこなう

注意点

・かならずしも、十分な環境下での作業ではないので、乾燥中にカビが繁殖しやすい。このようなカビの繁殖はむしろ、必ず起こるものとして認識していたほうがよい。その場合は、あわてることなく、消毒用エタノールを含ませたやわらかい布やティッシュで殺菌作業を暫時おこなっていく。なお、塗料のある資料や皮革資料にカビが繁殖した場合は、専門家と早急に話をしながら、作業手順を整理する必要がある。

5) 専門家との合流

注意点

1) から4) までの作業を実施できた場合は、ほとんどの資料は安定する。したがって、そのあとは、本格的な修復作業になってくるので、専門家と合流し、その後の対策を立てることが望ましい。

必要なもの

①安全靴・ヘルメット・作業服・マスク

*救出・洗浄で使用

②ブルーシート

*地面に引くためのもの。とりあえずは雨のかからないよう、外でくるみ保管する場合には使用

③水道水

*洗浄で使用

④刷毛・ブラシ

*洗浄、殺菌で使用

⑤柔らかい布（雑巾）、さらし

*洗浄で使用、さらしは破損した箇所を仮固定する場合も使用できる

⑥バケツ

*洗浄で使用

⑦消毒用エタノール

*殺菌作業で使用

⑧処置用ティッシュ

*殺菌作業で使用